
硝煙と放射能と異形のものども

i3otasky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

硝煙と放射能と異形のものども

【Nコード】

N6500S

【作者名】

i3otasky

【あらすじ】

1986年に爆発を起こしたチェルノブイリ原子力発電所。この跡地で2006年に再び謎の大爆発が起きる。

この爆発の影響により30k?に及ぶ広い範囲が核汚染の被害にあう。

時は経ち2012年。

汚染された跡地一帯は、突然変異によるモンスター達が生息する「

ゾーン」と呼ばれる危険地帯と化した。そんなゾーン周辺には生活するためのビジネスが成り立ちはじめる。危険な依頼を請け負いその見返りに多額の報酬を受け取り生計をたてていく「ストーカー」と呼ばれる荒くれ者達がゾーン周辺で暮らし始めていた。

STALKER(Shadow of Chernobyl)

1986年に爆発を起こしたチェルノブイリ原子力発電所。

この跡地で2006年に再び謎の大爆発が起きる。

この爆発の影響により30k?に及ぶ広い範囲が核汚染の被害にあう。

時は経ち2012年。

汚染された跡地一帯は、突然変異によるモンスター達が生息する「ゾーン」と呼ばれる危険地帯と化した。そんなゾーン周辺には生活するためのビジネスが成り立ちはじめる。

危険な依頼を請け負いその見返りに多額の報酬を受け取り生計をたてていく「ストーカー」と呼ばれる荒くれ者達がゾーン周辺で暮らし始めていた。

俺は吸っていたタバコを投げ捨て、スリングを通して掛けていたAK74を肩付けして構えた。

微量のアドレナリンが脳内で受容され、俺に軽い緊張と興奮を生じさせた。

俺に緊張を生じさせたのは一匹の大猪だ。

「ZONE」と呼ばれるチェルノブイリ一帯で現れる猪は、一般的に知られている猪とは大きくかけ離れている。

まず大きさだ。大抵の個体は2m近い巨躯を持つ。

次に凶暴性だ。一般の猪は、子持ちの母猪でもなければ、

人間を積極的に攻撃することは滅多に無い。だがZONEの大猪は違う。

自分の縄張りに近づいた物は見境無く徹底的に攻撃する。

たとえライフルの発射音を聞いたとしても、怯えるどころか更に興奮して突進してくる。

ライフル弾が命中し、致命傷を負ったとしても、突進は止まらない。命の火が消えるまで

文字通り死に物狂いで突進してくる。その様は正に狂戦士だ。

その狂戦士が俺から100m程の距離で草を食んでいた。

この距離までヤツの存在に気づけなかったのは、ここがなだらかな丘になっていたせいだ。

ヤツは丘のてっぺんで悠々と食事をしていたのだ。

迂闊だった。

このまま気づかれないよう立ち去ろう：

そう思って俺が後じさりを始めたときだった。

風向きが変わった。

そして、その風は俺が先ほどまで楽しんでいたタバコの匂いを大猪に届けてしまった。

ヤツは食事を止め、顔を上げて辺りを見回した。

目が合った。

一瞬にしてヤツは大猪から狂戦士へと変貌した。

正にタバコは百害あって一利無しだ。

俺が臍をかむ間もなく、狂戦士は雄叫びを上げながら俺に向って突撃を開始した。

ここで俺がしくじれば、ヤツは軽々と俺の体を跳ね飛ばした後に、その巨大な牙で俺の頭蓋骨を噛み砕くだろう：

緊張の度合いが一気に高まる。

俺は肩付けしていたライフルのセレクターを、フルオートに押し下げた。

旧式のAK47だった場合、弾薬や銃の構造上フルオートでは制御が難しい。

だが、これは小口径に改良されたAK74だ。

訓練された者ならば、フルオート時の制御は難しくない。

とは言え、無駄弾をばら撒いていればこちらがやられる。

俺は全弾フルオートで撃ち尽くしたい衝動をこらえ、

大猪に照準を合わせ点射した。

大気に小刻みに連続した、乾いた銃声がこだまする――

最初の数発は大猪のすぐ左の地面を抉った。

すかさず修正射を加える。

確かな手応え。

不思議なもので銃撃が対象に当たると確かに「手応え」を感じるものだ。

だが狂戦士は突進を止めない。

小口径が崇ってストッピングパワーが足りないのだ。

彼我の距離は50mを当に切っていた。

更に長めのバースト射撃を加える。

ほぼ全弾がヤツに命中し、さしもの狂戦士も地に倒れ伏した。

大猪を倒したのはこれが最初ではないが、これまでは常に遠距離からの先制攻撃だった。

今回の戦闘は流石に腋の下に嫌な汗をかいた。

残弾が10発前後になったマガジンを交換する。

常にフルロードされたマガジンを装填しておくのは「ZONE」で長生きする秘訣だ。

俺が勝利の余韻に浸っていると遠くからサイレンの音が響いてきた。それは凶報をつげるサイレンだった――

ZONEの其処此処に設置されたサイレンから耳を聳するような、それでいて、聞く者の不安をこの上なく掻き立てる警報音が鳴り渡る。

それは「ブロウアウト」と呼ばれる「死の嵐」がZONEに吹き荒れる事を

「ストーカー」達に警告している。

「ブロウアウト」が一体何なのか…

其れを正確に知るものはいない。

ただZONEに住むものの全てが知っている事はそれが

「致命的な量の放射能を伴って吹き荒れる暴風」

であることだ。

それはまるで突然発生する超小型の台風だ。

それは地上にいる無防備な生命を根こそぎ奪い去っていく暴君だ。

その魔の手から逃れるには頑丈なコンクリート製の建物、欲を言えば更にその地下施設に退避することが望ましい。

そして「ブロウアウト」が過ぎ去るのを、ひたすら祈りながら待つのだ。

今俺は「ブロウアウト」に対して無防備極まりない地上にいる。ここに長居すればするほど、俺の生存率は下がっていく一方だ。

手元のPDAを素早く操作し、最寄りの「セーフハウス」を探す。

セーフハウス：ブロウアウトが起きた時の緊急避難所だ。

ZONEで長生きしたければ多くのセーフハウスを知っていなければならない。

よってその場所の情報は金や物品との交換対象になりうる。

P D Aは三日前に、俺がB a rの飲んだくれから聞き出した（対価はウォッカのボトル1本）廃工場を示した。

（また加筆します）

STALKER\Shadow of Chernobyl(後書き)

御覧下さり有難うございます。

お手数かとは思いますが100点満点で採点して頂けるととても嬉しいです。

ご指摘など頂ければ、これに勝る喜び、執筆意欲を焚きつけるモノはございません。

どうぞ御一筆よろしくお願い致します。

久しぶりの来客

胃の中のものがこみあがるような浮遊感。

睨丸は瞬時にちぢこまり、俺は死の予感に全身を震わせた。

哀れに内臓やら骨やらを地面にぶちまける自分を想像して：

だが、俺に憑いていた疫病神はどうやら力不足だった。

恐怖の自由落下は2〜3mで終わった。

その上、バックパックが衝撃を大分吸収してくれた。

俺は自分の幸運に感謝した。全身を動かしてみたがどこにも異常は無いようだ。

…未だ盛大に血液を垂れ流している鼻以外には。

俺が落ちた穴はそう深くなく、工場の地下施設へ梯子で降りるための穴だったようだ。

ブロウアウトの方は今ごろ、この建物を直撃しているだろうが

地下にいると聞こえるのは鉄骨の軋む音と何かが工場の鉄扉を盛大にノックする音だけだ。

ここは安全だ…今のところは。

俺はフラッシュライトをつけて辺りの様子を探った。

そしてある事実が俺を不安にさせた。

―「梯子が崩れている」

脆くなったコンクリが梯子の基部ごと剥げ落ちてしまっている。

当の梯子も錆びによる劣化が酷く、とても立てかけて使うわけにはいきそうも無かった。

こうなれば別の出口を探すほか無い…。

俺は手持ちの装備を点検した。

マカロフ1丁、その予備マガジン3本。

手榴弾2個

サバイバルナイフ1本。

AKのマガジン6本。

簡易医療キット2揃い。

そしてクッションとなってわが身を守ってくれた寝袋1つ。

AKはまたあの忌々しいシドロビッチの親父から買わなければならないだろう。

嘆息する俺の視界の隅を、何かが過ぎ去った。

ぞわり、と俺のうなじの毛が逆立つ。

もし、今のがネズミではなくクリーチャーだとしたら、今の装備は甚だ心もとない。

俺は急いでマカロフのスライドを引いて薬室に弾丸を送り込み、更にスライドを半ストローク分引いて弾丸が薬室におさまっていることを確認した。

ヘッドギアに付いたライトの光を辺りに走らせるが何も異常はない。外が静かなのを見るとブラウアウトも山場は越えたようだ。

——そんなことを思った刹那、また何かの影が動いたような気がした。

この装備、この状況でここに長居するのは危険だ。

俺は地上へたどり着く手段を探すために歩き始めた。

やたら巨大なタンクが整然と並んだ部屋を歩いていると突然、小さな「歓迎委員会」が現れた。それらは3匹であり、3匹ともネズミのような形をしているが、おぞましい外見でその上二足歩行をしていた。

前足は鋭いかぎ爪になっている。

毛が全く無く、老人のソレのようにたるんだ皮膚を持ったソイツらは、

これまた喉に痰が詰まった老人のような、「ゲッゲッ」という不快

な泣き声を発していた。俺たちSTALKERの間で「デバネズミ」と呼ばれるクリーチャーだった。

体長30?にも満たないヤツらはさほど脅威ではない。

俺はできるだけ平静を保ちながら、

実際は鼓動を早鐘のように鳴らしながら、膝撃ちの姿勢をとった。

距離10m:まだ遠い:5m:ゲッゲツと耳障りな泣き声が大きくなる:距離3mを切ったとき

俺は先頭の1匹に向けて1発発射した。

とほぼ同時にソイツの頭がゴソリと欠け、そこから脳みそやら体液やらが弾けとんだ。

命中に気をよくしている場合ではない。

残りの2匹は仲間の死などに構わず突進してくる。

瞬時に右のデバネズミに照準し発射。

弾は胴体部分に当たり、そいつはバタリと倒れた。

残りの1匹は逃げ出すかとも思ったが予想に反して突進をやめなかった。

俺が2匹を撃ち倒している間に、ヤツは俺に飛びかかれる距離に達していた。

飛び掛ってきたソイツを俺はサッカーボールのように蹴り飛ばした。

「ギャッ」

と悲鳴を上げソイツは床を転がっていった。

すぐさま駆け寄り、足でソイツの腹を踏みつけて頭部にサバイバルナイフを突き刺す。ナイフは意外に柔らかい頭骨を貫通しハタ迷惑な「歓迎委員会」最後の一人の脳みそを掻き回した。勝った、という高揚感が湧き出てくる。だがその余韻に浸っている余裕はないようだ。闇がざわめき始めた。

久しぶりの来客（後書き）

御覧下さり有難うございます。

お手数かとは思いますが100点満点で採点して頂けるととても嬉しいです。

ご指摘など頂ければ、これに勝る喜び、執筆意欲を焚きつけるモノはございません。

どうぞ御一筆よろしくお願い致します。

宴

ざわめく闇の正体、それは見なくても解る。

デバネズミの大群：「歓迎委員会」の主力部隊だ。

デバネズミ共の真の脅威はその数にある。1匹の爪や牙は小さくとも、

20、30という数に同時に襲い掛かれれば、人間などひとまわりも無い。

小さな爪と前歯で、少しずつ肉を削り取られながら死んでいく苦痛と恐怖は想像を絶する。

俺はそうやって死んだ哀れなルーキー（ZONEに来たばかりの者はそう呼ばれる）を知っている。

ソイツの死に顔の凄まじさと言ったら無かった：

最も、皮も肉もほとんどそぎ取られた頭蓋骨前面を仮にそう呼ぶなら、だが。

俺はソイツの死体を見つけた時、あまりのおぞましさに吐き気を覚えたが、実際に吐いたのはそいつの頭蓋骨の眼窩から只のネズミが顔を覗かせたときだった。

俺は哀れなルーキーの二の舞になることだけは絶対に避けたいと願いつつ、

全力で部屋を駆けた。すぐに部屋の端が見え、

そこには分厚い鉄製のドアが開かれた状態で鎮座しているのが見えた。

もしこのドアが閉じた状態だったら俺はこの世で最も無残な死に方の一つに陥るところだった。

安心するのも束の間。

もはや、闇にうごめく影は実体となり、デバネズミの大群として俺

を猛追していた。

その数100匹以上：いや、実際には40〜50匹だろう、恐怖は敵をより強大な物に見せる物だ。

どこか冷めた頭でそう考えつつ、俺はドアに向けて全力疾走した。

途中恐怖の余り、狙いもつけず大群の方へマカロフを乱射した。

乾いた発射音が地下室に3回響き渡る。少しでもヤツラの歩みを鈍らせればと思ったが、

残念ながら全く効果はなかった。

とにかく今は一刻も早くあのドアを抜け、すかさずドアを閉めヤツラを地下に閉じ込めるしかない。

ドアまであともう少しというところで、

右手の暗がりから新たなデバネズミが2匹飛び出してきた。

俺はそのうちの左側のヤツを走ってきた勢いのまま蹴り上げた。

ブーツ越しにソイツの骨が砕け、内臓が潰れたのが判る。

ソイツは潰されたカエルのような悲鳴をあげながら、開かれたドアから外に吹っ飛んでいった。

「これがサッカーなら1ポイント先取といったところだな。」

そんな思考をした俺は、俺自身がこの状況においても、落ち着きを失っていないことに安堵した。

俺のサッカーボールになり損ねたもう1匹は、すかさず右足に喰らい付いてきた。

だが分厚い皮の軍用ブーツには文字通り歯が立たないらしく、もっとやわらかいところを目指して俺の体をよじ登ろうとしている。俺はすぐさまソイツの口の中に、マカロフの短い銃身をねじ込み、発射した。

ややくぐもった発射音とともに、そいつは天国へと（クソ忌々しいコイツラにも天国があるならば）

旅立った。

邪魔者を排除した俺は今度こそドアに突進し、通り抜けた。
ドアの外は左右に延びた真っ暗な通路に為っていた。
悠長に通路の安全を確かめている暇はなかった。

早くこのドアを閉めなくては！

俺は厚みが30cmはあろうかという重い扉に手をかけたが、長年
放置されていたで
あろうそのドアは、「今更閉じろとは何事だ」とでも言いたいのか、
ぴくりとも動かなかった。

「歓迎委員会」の主力部隊は不気味な不協和音を奏でながらドアへ
と近づいてくる。

こうなったら一か八かだ。

俺は胸元に括り付けてあった手榴弾を手にとった。

安全ピンを抜こうとしたが手が震えて一度つかみ損なってしまった。
な

んとかピンを抜き、手を開くと、カキンという音と共に安全レバー
が跳ね上がり、床に落ちた。

俺はすぐさま、さっきまで俺とデバネズミ共の居た部屋の中に手榴
弾を放り込んだ。

手榴弾がバウンドしながら転がり、ヤツラの鼻先に到達したのが、
ドアから離れる一瞬の間に見えた。

この密閉された空間で手榴弾を使えば衝撃波はデバネズミだけでなく
、通路に居る俺にもダメージを与える可能性がある。

俺はできるだけドアから遠ざかり、心の中で3秒数えたときに飛び
込むような形で身を伏せた。

衝撃波に備えて、目を閉じ、口を開け、両手で耳を塞いだ。

一瞬の静寂――

次の瞬間、猛烈な音と衝撃波が俺を襲った。

宴（後書き）

御覧下さり有難うございます。

お手数かとは思いますが100点満点で採点して頂けるととても嬉しいです。

ご指摘など頂ければ、これに勝る喜び、執筆意欲を焚きつけるモノはございません。

どうぞ御一筆よろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6500s/>

硝煙と放射能と異形のものども

2011年10月9日01時09分発行